

企業の研究所で働くということ

What does it mean to be a researcher at a company?

○ 松崎 雄一郎¹(NTT 物性研)

○ Yuichiro Matsuzaki (NTT Basic Research Lab)

E-mail: matsuzaki.yuichiro@lab.ntt.co.jp

私は、東京大学で2007年3月に修士号を取得しましたのちに、2008年1月から2011年1月までオックスフォード大学に在籍してPh. Dを取得しました。その後、フィンランドのアールト大学で二カ月間だけポスドクの経験をしてから、2011年の4月からNTT物性研で働いています。研究テーマは、学生のころから今にいたるまで一貫して量子情報理論です。国内の大学、海外の大学、国内の企業という、様々な異なる環境で研究をする機会が与えられました。そのため本講演では、それぞれの環境における研究スタイルの違いにつきまして、個人の経験をベースにしたものですが、お話しをさせていただきます。

国内の大学に在籍したときの経験から、日本では多くの学生が博士課程へ進学すること（あるいは、進学してしまったこと）への不安を抱えていると感じます。大きく分けて二つの理由が挙げられます。ひとつは在学中の経済的な不安です。近年になり改善の傾向はみられますが、それでも海外に比べて博士課程の学生への金銭的サポートが十分ではありません。多くの学生がアルバイトをして生計を立てながら博士課程を過ごしているのは、海外の理系の大学ではなかなか見られない光景です。もうひとつは卒業後の進路についての不安です。アカデミックポストが少ないことに加えて、日本では博士号の取得が企業への就職に有利に働かないという状況があります。さらにポストドクターになると民間企業への転職は、一般的には難しくなります。

海外の大学では、博士課程の学生はもっとリラックスして研究を進めている印象を受けます。理系であれば、在学中は十分な額の奨学金を受けながら研究を進めることができ、卒業後にポストドクターとしての経験を積んでも、それが数年程度であれば企業に転職することも比較的容易にできます。民間企業への就職が難しくないために、海外の博士課程の学生は、日本の学生に見られるような不安は少ないようです。ただし海外でも、ポストドクターを何年も続けて、ある程度の年齢に達すると、企業への就職は難しくなるようです。遅かれ早かれ、あるタイミングで、アカデミックの世界に残るか、企業で働くかを決断する必要がある点では、日本と同じと言えます。

最後に、国内の企業で働くことに関して、ご説明したいと思います。国内の企業で働くことの最大の利点は、若いうちからパーマネント（もしくは準パーマネント）の立場で研究を行うことが許される点です。日本は、新卒採用の伝統がありますので、経験がまだ浅くとも、大学卒業直後の人材を採る傾向があります。また、全てではないですが、多くの企業では終身雇用の形態で研究者を雇ってくれます。経済的な安定を保証してくれたうえで、長期的な研究に腰をすえて取り組めることは、大きな利点です。また教育の義務がないこと、企業ゆえに多くの実験装置を取り揃えていることも大きな特徴です。しかしながら当然、欠点もあります。日本の会社は、specialistを育てるよりもgeneralistを育てる傾向があります。そのため、大学であれば事務職や知財部の方が行うような仕事も、研究者が行うことがあります。また、共同研究を行うには契約の締結が求められることもあり、大学に比べてやはり一長一短ということです。

これらの情報が、これから研究者を目指す方々に、何らかの参考になれば幸いです。